
王子様に囲まれて

空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

王子様に囲まれて

【Nコード】

N6988Z

【作者名】

空

【あらすじ】

普通の女子高生・愛実の通う青銀学園には3 sと呼ばれる王子様3人がいる。愛実は3 sが大嫌い。席が近くなったことをキツカケに、3 sに関わらざるを得なくなった。そして、3 sのリーダー・海都は実はちよー俺様だった！3 sに関わっていくうちに、3人の本当の姿が見えてくる。大嫌いなのに、惹かれてしまう。愛実が最後を選ぶのは？！

大嫌いな王子様

あたしは空川愛実。そらかわあいみ 青銀学園に通うごく普通の女子高生。

「キヤー3 スリーエス sよー!!!!!!」

「キヤー!!!!!! カッコイイ!!!!!!」

この学園には3 sと呼ばれる3人組がいる。

みずやまつみと
水山海都。高2

クールで大人びている。3 sのリーダー的存在。

つきおかりきや
月岡力弥。高2

しっかり者で、頼りになる。3 sの兄貴的存在。

ほしざわなおき
星沢直樹。高2

お調子者で、天然。3 sのムードメーカー的存在。

3 s 3 s t a r つまり星の3人組ってわけ。

3 sはこの学園の王子様らしい。

はつきり言って、あたしは興味ないが。

「おっはよー」

「琉穂、るほおはよ」

「相変わらず、3 sは朝からすごいね。」

「どこがかっこいいのか、あたしには全然わかんないんだけど。」

「愛は、嫌いだもんね。あーゆるタイプ。」

そう、あたしは3 sが大嫌いだ。

自分はモテるとでもいうような、自分をカッコイイと思っている奴

が大嫌いなんだ。

それなのに、今あたしは3 sの3人と同じクラスなんだ・・・。

その日のホームルームで、あたしに最悪なことが起きた。

「おい！今日は席替えするぞー。いやーずっとしようと思っ
たんだが、

なかなか出来なくてなあー。」

という担任のにもっちゃん（西本）の一言から始まった。

「くじここにあるから、男子は坂口から、女子は浅田から引いて
けよー。」

引いたら、黒板に書いてある座席と同じところに移動しろよー」

そう言われ、くじを引いてみると、窓際が一番後ろだった。

「愛ーどこだったー？」

「窓際が一番後ろー。」

「マジー？あたしは廊下側だよー。」

「めっちゃ遠いね・・・。」

「本当だよー。ってか、3 sはどこなんだろうね？

みんな狙ってるし！」

「そだね？」

すると、クラスの女子がやつぱり3 sに席を聞いていた。

「海都君たち、席どこ？」

「俺ら、3人ともみんな近くだよ！窓際の後ろ！」

「！？」

あたしは一瞬耳を疑った。

「愛！愛の隣、海都君だよ！で、その前が力弥君と直樹君！」

「ウソでしょ・・・。」

そう。最悪なことにあたしは3 sにかこまれてしまった。

「おい！早く席移動しろよー！」

そして、3 sはあたしの隣、前、斜めになってしまった。

「どうもっ！これからよろしくね！空川さん♪」

最初に声をかけてきたのは、やっぱり星沢直樹だった。

「・・・どうも。」

無視をするわけにもいかず、下を向いたまま挨拶だけ交わした。

あたし、これからどうするのー（泣）

王子様の素顔

休み時間、あたしは逃げるように琉穂のところに行った。

「琉穂ーもうマジ最悪。」

「よりにもよって全員集合だもんね。」

「うん。もうありえないよー。」

「まあ、しょーがないよ。それに、狙ってた人のが多いんだから、そんなこと言ったら、起こられるよ。」

「喜んで変わってあげるっつーの。」

「まあ、にしもっちゃんに言いな。」

「早く席替えしてほしいよー。」

「ドンマイ。次移動教室だから行く。」

「うん。」

ありえなさ過ぎるよ・・・。

角だから、3 s 以外に人はいない。

つまり、嫌でも関わらなくちゃいけないってわけ。

マジで最悪・・・。早く抜け出したいよー。

なんて思いが通じるわけもなく、あたしは3 s と関わることに・・・。

そして、1週間がたった頃、あたしはある秘密を握ることになる。

それはある日の放課後、あたしは1人教室に残っていた。

日直の仕事を終え、帰ろうとしたとき、空き教室から、誰かの声が聞こえた。

「海都君のこと好きなんだけどさあ。あたしと付き合わない？」

それは、同じクラスの谷口さんが水山海都に告白しているところだった。

あたしは、ドアの影に隠れて、その現場を見ていた。

ガタッ

だが、その拍子にドアにぶつかってしまい、見つかってしまった。

「あんだ何？」

「あつえつとー。」

言い訳を考えていると、水山海都が近づいてきた。

「谷口さん。すみませんが、僕はこの子と付き合っているので。

あなたとは、付き合えません。」

「えっ?!」

あたしは、突然の出来事に頭がついていかなかった。

「ちよつと何言つて・・・!!」

反論しようとしたが、水山海都に手で口をふさがれてしまい、何もいえなかった。

「えっあつ・・・。」

谷口さんは、そのまま走って帰っていった。

「ちよつとあんだ何言つてんのよ! なんであんなこと言うわけ!? 信じらんない!!!」

水山海都は何も言わなかった。

「ちよつと聞いてんの?!」

「・・・うつせーな。」

「はっ?!」

それは、とても低い声で、さっきまでの王子様キャラとはまるで別人だった。

「いちいちうるせーな。安心しろ。お前には興味ねえから。」

「はあ?! こつちだつてあんだに興味なんかないわよ!」

「お前さ、俺のこと、嫌いだろ。」

「ええ。嫌いよ! みんなに騒がれて、いい気になって。自分をカッコイイとか思つてるあんだが大嫌いよ!

それに、こんなに俺様のくせに、あんな王子様キャラなんか演じちゃって。マジありえない。」

「フツ。お前気に入った。おい、明日から昼休み屋上来い！」

「はあ?! 行くわけないでしょ。」

すると、水山海都は近づいてきて、あたしは壁とあいつに挟まれてしまった。

「な、何よ!」

水山海都は壁に手をついて、あたしを見下ろしてきた。

長身のせいで、すぐく見下ろされてしまう。

「ぜってー来いよ。愛実。」

あいつはあたしの耳元でそうささやくと、帰っていった。

「何で、あたしが・・・。」

悪魔の王子様？！

次の日の昼休み。

「海都君、お昼一緒に食べない？」

「すみません。約束をしていますので。」

水山海都は、チラツとあたしのほうを見て言った。

「そっか。残念。」

「愛ーお昼行こー！」

「うん！」

琉穂にそう答えたとき、水山海都に軽く睨まれた。

「あー琉穂ごめん。今日、約束あったんだ。ごめんね。」

「そっか、わかった。」

「じゃあ、またあとでね。」

「うん。」

あたしがそう答えたのを確認するかのようになり、水山海都はこっちを見てから、教室をでて行った。

あたしも、教室をでて、屋上に行った。

そして、屋上に行くと、3　sがそろっていた。

「おい！おせーぞ！」

「遅いつて何よ！」

「早くこっち来い！」

「あー空川さんじゃん！」

「どうも。」

「君だったんだね。海都の気に入った子って。」

「おう！こいつ、おもしれーんだもん！！」

「面白いつて失礼ね！で、わざわざこんなところにまで呼び出して何

の用？」

「まあまあ、空川さん。そんなに力リ力リしないで！俺、星沢直樹！よろしく！」

「あ、空川愛実です。」

「俺は、月岡力弥。よろしくね。」

「あつ、はい。」

「愛実ちゃん、敬語じゃなくていいよ。俺らタメなんだから。」

「そうだよー！ねっ愛ちゃん！」

「気に入られてんじゃん！愛実。」

「で、何の用？」

「俺の昼飯買つて来い。つつか、お前の昼飯くれ！」

「はあ？！あんた何言っちゃってんの？！」

「別に、そのままの意味だけど。」

「ありえないから。それにあたし、お弁当だし。」

「なら、その弁当くれ！」

「あんた、さつきから何言ってるの？ありえないから。」

「早くしろっつーの！」

「嫌よ！あたしのお昼ご飯がなくなるでしょ！」

そう言い返したときには、あたしのお弁当は水山海都に取られていた。

「ちよつと！返してよ！」

「うまい！！！」

「当たり前でしょ、どんだけ料理してると思ってるのよ！」

「お前、これ自分で作ってるの？」

「そうよ。」

「愛実、天才！　ってことで、これからも頼むぞ！」

「はあ！？」

こうして、あたしは3　sに、

いや、あの悪魔に気に入られてしまったのだ。

落書き

それから、あたしは毎日屋上に行くようになった。

大嫌いだと思っていたsとも関わっていくうちに、3人の本当の姿が見えてきた気がした。

そして、2週間がたった頃だった。

朝、いつも通りに学校に行き、教室に入ると、黒板に何か落書きがされていた。

「2年c組空川愛実は卑怯な女。3sを脅し、関係を強要。

男なら誰でもOK。欲求不満女。いつでも連絡してね。080-

xxxx-xxxx」

「・・・なにこれ・・・。」

わけがわからなかった。どうして・・・？何で・・・？すると、勢いよく琉穂が教室に入ってきた。

「愛！他のクラスにも書かれてる！！」

あたしは、混乱したまま、ただ黒板の落書きを消そうとした。その時だった。

海都SIDE

俺は、力弥と直樹といつもどおり学校に行くと、なんだか嫌な予感がした。

そのまま、2年の教室のある3階まで上がっていくと、みんなの雰囲気が違うことを察した。

「なあ、なんか雰囲気つか空気違うないか？」

そう声をかけてきたのは、力弥だった。

「お前もそう思つか？俺も思った。」

「えっ？何の話？」

「俺、何か嫌な予感がするんだよな。」

「当たらないといいんだけどな。」

教室に入り、その予感が当たってしまったことに気づいた。

黒板に書かれている落書きは、愛実を中傷する落書きだった。

そして、愛実がその落書きを消そうとしていた。

けれど、全身が震えているようで、うまく消せていなかった。

「あつ、海都君……。」

クラスの誰かが俺に気づいたことで、みんなが俺のほうを向いた。そう、愛実も。

俺は、苛立ちながらも精一杯平然を装って、愛実のところへ行った。

「海都くん……。」

「海都君、この子に脅されてるんでしょ。だから毎日、お昼だって一緒に食べてるんでしょ。」

こんな子最低じゃないの。脅してまで s に近づこうなんて。」

「あたしは別に……!」

「谷口さんですか? こんな嘘を書きたてたのは。」

「えっ……そんなわけないじゃない。それに、本当のことじゃない。」

「冗談にしては度が過ぎるんじゃないありませんか? 空川さんには、脅されてなんていませんよ。むしろ、僕たちがお昼を誘っているんですから。ねえ、力弥、直樹?」

「そうだよ。」

「空川さんに悪気はないと思いますが。こんな落書きを書くとは、いくらなんでも、子供じみていますよ。谷口さんは、そんな小さな子供ですか?」

俺は、いつもの王子様キャラで、谷口に釘を刺した。

「そんなわけないじゃない! ほら、ミカ、アキ早く消すわよ!」

そう言っと、谷口は落書きを消しだした。

悪魔の優しさ

* 愛実SIDE *

あたしは、混乱していて何もできなかった。

そんなあたしを、あいつが助けてくれた。

あいつが言ってくれたおかげで、落書きは消された。

あいつは、いつも通りの王子様スマイルをしていたけど、目の奥が笑ってはいなかった。

一応、みんなは信じてくれたけど、正直あたしは居心地が悪かった。

「空川さん、大丈夫ですか？」

「・・・うん。」

はつきり言って、そのあとの授業は頭に入らなかった。

そして、時間は過ぎ昼休み。

あたしは、正直迷っていた。

でも、あいつが目で訴えてきたから、行くことにした。

「愛、大丈夫？」

「うん、大丈夫だよ。心配しないで。」

「わかった。」

あたしは、複雑な気持ちを抱えたまま、屋上に行った。

ガチャッ

「おい！おせーぞ！」

「愛ちゃん、やっと来たー！遅いよー！」

「あっ、ごめん。」

あたしは反射的に謝っていた。

「あのさ、朝はごめんね。みんなにまで、迷惑かけちゃって。」

「あれは、愛実ちゃんのせいじゃないよ。」

「そうだよ！愛ちゃんが謝る必要ないよ！」

「谷口、このまま終わらねえだろうな。」

「そうだな。あの谷口がそう簡単に引き下がるわけないよな。」

「あたしは、大丈夫だから。」

「ごめんな、俺のせいで。」

「別に、気にしてないよ。」

「安心しろ。これから俺が守るから。」

「えっ。」

あたしは、正直驚いた。あの悪魔がこんな優しい言葉をかけるなんて。

少しだけ、あいつのことを、見直した。

嫌がらせ

あの悪魔に優しい言葉をかけられて、あたしは正直驚いた。それと同時に、安心感を覚えていた。

それからあたしは屋上に行き続けていた。

そしてある日、あたしはいつもよりも早くに学校に行った。すると、教室に谷口さんたち集団がいた。

「あら、空川さんじゃない。少し話しましょうよ。」

「・・・。」

「空川さん、まだ3　sに付きまとってるんでしょ。」

「別にあたしは！」

「怖いわよね。あんな風に助けてもらったからっていい気になっくんじゃないわよ！」

あたしは、突き飛ばされた。

「今すぐ3　sから離れなさい。もう金輪際、3　sに関わるんじゃないわよ！」

谷口さんたちはそう言って、教室から出ていった。

そして、3　sが教室に入ってきた。

「海都君、おはよー。」

「おはようございます。」

3　sが教室に入ったと同時に、谷口さんがこっちを見て睨んだ。そう、3　sに関わるなという合図。

「空川さん、おはようございます。」

「・・・。」

あたしは、無視した。

それを見て、谷口さんは満足気に笑っていた。

そして、昼休み。

いつもなら、すぐに教室を出て行く谷口さんが、今日はまだ教室に残っていた。

きつと、あたしが屋上に行かないかを確認しているんだろう。

まだ3 sも教室に残っていた。

だからあたしはわざと3 sにも聞こえる声で、琉穂に話しかけた。

「琉穂ー！お昼行こー！」

「えっ？あーうん、いいよ。」

琉穂は、不思議そうな顔をしていた。

それもそのはずだろう。今まであたしは、屋上に行っていたのだから。

それを聞いていたあいつは、こっちを見ていたが、あたしは知らないフリをして教室を出た。

次の日も、その次の日も。

あたしは、そうやって3 sを避けるようになった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6988z/>

王子様に囲まれて

2011年12月31日16時08分発行